

輪島市海士町のことばと海士町町民のルーツ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 新田, 哲夫, Nitta, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00050865

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



輪島市海士町のことばと海士町町民のルーツ

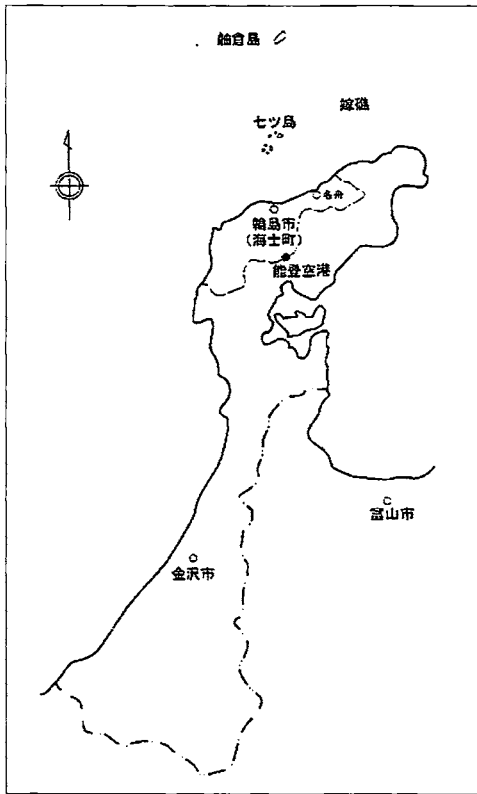
新田 哲夫

1. 海女の町

輪島市の中心部には、河井町、鳳至町、輪島崎町、海士町の四つの町があり、このうち海士町は、海女の素潜り漁が行われている「海女の町」でもある。海女の伝統的な潜水技術は文化的に大変貴重なものとみなされ、二〇一四年に石川県無形民俗文化財に指定されている。海士町の人たちの主な漁場は舳倉島および七ツ島である。舳倉島は輪島港の沖合約五〇キロメートルにあり、周囲約五キロメートルの小さな離島である。その手前に七ツ島という小群島と東方に嫁礁という岩礁がある。一九七〇年代までは町民一斉に舳倉島に移り住み、アワビ、サザエの貝類、ワカメ、テングサなどの海藻を採り、夏が終わると輪島に帰ってくるという、輪島と舳倉島の二重生活を続けていた。海士町の住民は、このように輪島市では他にはない独特の生活形態をもっていた。

2. 異なる言語と出自

生活形態以外に、海士町の言語は周囲の方言とは著しく異なっていると言われている。輪島市街地の住民は、海士町のことばを少し聞いただけで、話し手が海士町の人だと直ちに判断できる



という。隣接する地区の言語と異なることは古くから指摘があり、『石川県鳳至郡誌』（一九二三年）にも、「海士の言語は付近の各部落と異にして、はなはだ解し易からず。その語調もまた特殊のものたり。」（四六一頁）と書かれている。

実は、海士町で海女さんの素潜り漁が盛んなことと、ことばが周囲の地区と異なることは、深いところまでつながっている。海士町の人々は、元来輪島の土着の人ではなく、古くから素潜り漁の技術をもった漂海の民が移り住んできたという謂われがあるのだ。

海士町の口伝の一つによると、「永禄年間（一五五八〜一五七〇年）に筑前国鐘ヶ崎の海士又兵衛が漁船三隻に乗り、男女十二人を率いて、能登国羽咋郡に漂着、赤崎千ノ浦海岸に小屋を作って住み始めた」のが現在の海士町住民の始まりと言われている。

また、金沢出身の篤学の士、森田平次（一八二三〜一九〇

八)が著した『能登志徴』のなかに、『舳倉島旧記』という書物が引用されており、そこに海士町民の出自について書かれている。それをまとめてみると次のような記事である。

「永禄十二年(一五六九年)に筑前国上座郡金ヶ崎(鐘ヶ崎)の漁人が、知人を訪ねて能登の羽咋郡赤住村・鳳至郡吉浦村・皆月村に渡ってきた。春に来て秋になると帰っていたが、能登国は資源が豊富なため、文禄三年(一五九五年)には鳳至郡鵜入浦に借家、二十二年後、元和三年(一六一七年)に海士又兵衛は藩主前田利常公に願い出て、光浦に居住することを許され、舳倉島、七ツ島に渡って漁を行っていた。寛永二十年(一六四三年)に運上の御印書を与えられ、さらに慶安二年(一六四九年)十月十六日、利常公から輪島鳳至町領内に一千歩の土地を拝領し、永住することになった。」

終盤に書かれている「慶安二年、輪島鳳至町領内に一千歩の土地を拝領し永住」ということは、隣の名舟町の古文書で確証が得られ、今から約三七〇年前に現在の海士町天地に定住したことは確かかなようである。また能登に渡来した海士町の祖先の出自は、筑前国鐘ヶ崎(現在の宗像市鐘崎)であると特定する決定的証拠はないものの、いくつかの文書で「西国」から来たことになっており、その点は揺るぎないことのようにである。

3. 言語学からみたルーツ

現在の海士町で、周りにない方言特徴（音韻、語法、語彙）があつて、これが九州などの「西国」にあれば、海士町の住民はそこから移り住んできた証拠になる。その際、その特徴が輪島市よりも少し広い範囲、すなわち能登、石川県では見られない特徴であることを確認する必要がある。もし近隣の地域でも見られる特徴であつた場合、海士町という奥能登の町で、ぼつんと能登の古い特徴が残つたということもあり得るからである。

日本語諸方言について全国的に調べられる主な資料としては、(ア)『日本方言大辞典』(一九八九年、小学館)、(イ)『日本方言地図 全六巻』(一九六四～一九七四年、国立国語研究所編、LAJと略)、(ウ)『全国方言文法地図 全六巻』(一九八九～二〇〇六年、国立国語研究所編、GAJと略)がある。海士町のある方言形が、はたして九州に分布しているのか、あるいは別の地域にも分布しているのか、それらの資料を通して確かめることができる。

海士町方言の研究については、岩井隆盛金沢大学名誉教授(一九〇九～一九九五)の先駆的研究がある。岩井氏が海士町を調査し始めたのは、おそらく一九五〇年ごろからである。岩井氏は海士町の伝承に従つて、母村と目される福岡県宗像市鐘崎にも何度も足を運び、海士町と鐘崎の両方言の比較を行った。

岩井氏が調査をすすめていた頃は、方言の全国分布を概観する資料があまりなく、海士町と鐘崎の間の地域の様子がどのようなようになっていたか、詳しくは分からなかつた。例えば、岩井氏は「つ

らら(氷柱)の方言形で、海士町のモーゴ、鐘崎のモーガンコを関係ありそうな形としてあげているが、二つの地点の間で、これに類した語形が一切存在しない、ということでは分からなかった。しかし、現在は(イ)の LAJ の 262 図「つらら」の全国分布によって、モーガンコやモーガが九州の福岡、大分両県にあり、本州には全く見られないことがわかる。一方、海士町のモーゴという語形も、能登どころか全国どこを探しても海士町以外では全く見られないことがわかる。こうした分布とそれぞれの形から、九州と海士町の濃い関係が窺える。おそらく、九州にあるモーガンコやモーガがもとで、海士町に伝来するときにモーガ↓モーゴという変化が起きたと推定できるのである。

4. 文法項目

「つらら」のような二つ二つの語彙項目は、二つの地点間の偶然の一致を完全に排除できない。しかし、文法項目のような言語体系の根幹に関わるものについては、偶然の一致が起きにくい。文法項目で九州とその近辺に分布し、一気に飛んで海士町に孤例としてあれば、それは両方言の密接な関係の証拠となる。

その例としてあげられる一つは、動詞に付くヨルという形である。九州全域と中国地方では、標準語の「〜テイル」にあたるヨルとトルを区別する(資料(ウ) GAJ の 198 図 199 図)。例えば、「(桜の花が) 散りヨル」(進行《今散っている最中だ》)と「散つトル」(結果《散ってしまった

た後だ㉔)のように、標準語では「散つテイル」で表される「進行」と「結果」を形の上で区別しているのである。能登では「進行」も「結果」もトルで表すが、海士町では「進行」にヨルを用いる。ただ、能登一般と同じように、トルで「進行」を表してもよく、「進行」の形式にヨル・トルの両方が用いられている。ヨルは北陸では海士町だけが用いているので、この例も西日本との関係を裏付けるものである(ただし、西日本のヨルの分布域は広く、海士町と鐘崎の関係を直接示す証拠にはならない)。

もう一つの例は、助詞のイである。イという助詞は「くへ」のエ(あるいは「くに」のニ)が変化してできたものと推定される。この助詞イは、「方向(東の方)行く」、「着点(東京に着く)」、「存在の場所(ここに)ある」の用法で、それぞれ分布の違いはあるものの、九州ならびに本州西部と四国の一部でみることができ(資料(ウ)GAJの19図20図24図)。海士町ではこれらすべての用法で助詞イを用いる(東の方イ行く、東京イ着く、ここにイある)。特に全国方言で助詞イを「存在の場所」で用いる地域は狭く、海士町と福岡県の一部のみである。このことは海士町と福岡県との関係を強く示唆するものである。

5. その他の証拠

海士町と鐘崎の両方で用いられるもので、ここで取り上げなかった文法項目として可能表現の「くキル」がある(「書きキル」で「書くことができる」)、「書きキラン」で「書くことができない」。

また語彙項目もいくつかあり、岩井氏があげているもので、クルブク（うつむく）、ネズム（つめる）、ホメク（火照る）などは、現在の海士町でも鐘崎でも用いる単語で、九州で優勢な語である。さらに、筆者の調査によれば、ナオス（片付ける）、フトイ（大きい）、スクレル（水中で寒くなる）、ホガス（穴を開ける）、クロズミ（打ち身のアザ）などがそれに当たる。これらは海士町にあつて北陸にはなく、また鐘崎で共通に用いられている（一部は用いられていた）語である。

6. むすび

こうしたことを総合すると、海士町のルーツが福岡県鐘崎であることを支持する材料は多く見つかつても、それを否定する材料はないと言つてよい。ただ、言語の面からルーツとして絞られる地域は、福岡県という所までであろう。福岡県宗像市鐘崎だけにある方言形で、海士町にも共通にあるものは見つかつていない。ただこれは、鐘崎方言が宗像方言、あるいは福岡方言、広くは九州方言のひとつであつて、海士町方言のような孤立した方言ではないことから、鐘崎だと特定できる独自の方言語形が見つからないことは仕方のないことであろう。

いずれにしても海士町のことばが、約四〇〇年近くたった今も、遙か源郷の面影を残していることは奇跡というほかない。なぜこのようなルーツのことばを保存しているかは、海士町独自の社会構造が関係しているが、これについては、また別のところで論じることとしたい。

参考文献

石川県図書館協会（一九六九）『能登志徴 下編 復刻』（森田平次一九世紀末稿、森田外与吉一九三六年浄

録）

石川県鳳至郡役所編（一九二三）『石川県鳳至郡誌』

岩井隆盛（一九五二）「海士（舳倉）方言の概観」『国語方言』二、石川国語方言学会、一一～二二頁

岩井隆盛（一九五五）「言語から見た海士の出自」九学会連合能登調査委員会編『能登 自然・文化・社会』

平凡社、一一二～一二〇頁

岩崎才吉著・新田哲夫編（二〇一六）『輪島海士町のことば 語彙と文例集』金沢大学人文学類

国立国語研究所編（一九六四～一九七四）『日本方言地図 全六卷』大蔵省印刷局

国立国語研究所編（一九八九～二〇〇六）『全国方言文法地図 全六卷』財務省印刷局

徳川宗賢監修（一九八九）『日本方言大辞典』小学館